

真宗の宗教学的的研究

— 序説・真宗の問題点 —

Prolegomenon to the Study of Shin Buddhism.

— its problematical points.

岡 邦 俊

一、真宗の研究についての問題

現代の真宗に対する研究の態度は、極言すれば、徳川時代の宗学のカテゴリを余り出していないようである。自己の所属する宗教が最優秀のものであると信じ、この最優秀性を大前提として一切の研究が進められている。たとい真宗が最優秀の宗教であることが、結果的に立証されても、それには多くの資料と多角的な論証が必要な筈である。それなのに、そのなすところは多くは訓詁註釈を主体とし、新しい解釈もなければ批判もない。あくまでも神話学的で、独善的であり、弁護的であり、是認的である。さなくば、抽象的な形而上学的な哲学ではない。批判と自由なる解釈のないところに学問が成立するであろうか。

昔から宗祖の著述については、「一言一句もおろそかにしてはならぬ」と云う。これでは宗教の学問的研究は歯止めをされたも同然であ

る。因みにそのようなことを云う人は、親鸞の主著である「教行信証

」の「信巻」の別序を心して読むがよい。

「浄邦をねがふ徒衆、穢域をいとふ庶類、取捨をくはふといふとも、毀謗を生ずることなかれ」⁽¹⁾（点線は筆者）

親鸞自身は、取り、捨ててくれてもよい、と云はれており、たゞこれをそしってはならない、と云っているのである。本典と云えども取捨選択は自由に許されてある。故意や悪意や無知のためにこれを悪口したり、そしてはならぬと云うのである。親鸞自身の著述の多くは、先師先輩の著述を自由に取捨選択した最もよき見本ではなかったか。一言一句も動かさずして、宗学や教学の研究は、成立するものではあるまい。又このような態度では、宗学や教学の進歩もなければ、現代的適応性も期待できないであろう。

本来宗教は人間のなまなましい生活の中に発生し、生長したものである。換言すれば、宗教はもともと人間のために存在するものなのである。宗学や教学のために人間が存在するのではない。即ち、現実に

生きる実存的人間の苦悩、悲憂、矛盾、対立、闘争、不安、絶望、破綻を解決して、「安心立命」することこそが宗教の究極ではあるまいか。その人間を抜きにし、人間の理解出来ない、宗学や教学があつてはならない。換言すれば、この私が安らかな心で、日々をよるこび生き、人生を終るとき、安らかな心でよろこび死んで行くことの出来る道こそ宗教ではあるまいか。それがまた同時に宗学、教学と呼ばれるものの重要な課題ではあるまいか。

現代に於て、真宗を研究する学問の名称は不定で、多数あるようである。「宗学」「宗乘」「真宗教学」「真宗学」「真宗概論」「真宗学概論」等々と。私の手許にある僅かな書物の中にさえ、このように色々の名称が使用されている。それらの著述では、それぞれ立派な研究が発表されているが、本質的内容には殆んど異変はなく、残念なことには一般大衆には恐らく理解しにくいものである。古き伝統のわくの中に閉じこめられて、出ることが仲々に困難なようである。多少の用語や表現の近代化や、西欧の哲学的思想の応用はあつても、本質的には依然として、「わが宗尊し」であり、わが宗こそ最優秀であり、それを何らかの形で是認し、弁護している立場が殆んどの研究でとられている。かつて学問論として一時、「方法論」がやかましく論議されたことがあつたが、その成果は期待したほど実際の宗学の学問的研究には生かされてはいないようである。現代の宗学的研究に一度、学問研究上の方法論を取り上げられ、解釈と批判の自由な純粋な学問的討議の行われることを望みたい。ブルトマンの非神話化の捉唱にも宗学の研究に示唆するところもあろう。バルトやブルンナーの

プロテスタント神学にも学ぶべきものが多かるう。キエルケゴール、ヤスパース、ハイデッガー、等の実存哲学者を初めとして、欧米の専門仏教学者の主張にも耳をかすべきものもあろう。宗教学や宗教哲学の研究も貴重な資料とならう。それにもまして、私の望みたいことは、真宗学系統の学者と仏教学系統の学者との協力、共同研究は、真宗学の研究に大きなプラスとなるであらう。

何れにもせよ、真宗の学問とは何か、真宗は果して純粹学問の対象になる宗教であらうか。

真宗を学問すればするほど、真宗がわからなくなつたり、真宗的生活から遠ざかる、と云つたような学問であつていいであらうか。一文不知の平凡な人間、極重の悪人でさえも聞かれ、実践出来ると云われている、仏教の中で一番の易行道である、と宣伝布教されている真宗は果して学問によらなければ、理解出来ないものであろうか。これを一般大衆に理解させるための「現代教学」とは、そも如何なる内容のものでなければならぬか。このような広い意味での方法論上の問題は、極はめて地味なものではあるが、今日、更めて真宗の研究には最も必要な課題ではあるまいか。

「もともと、宗教や信仰は学問でもなければ、哲学でもない。学問や研究は宗教の補助的、第二義的な操作であつて、宗教を信仰することを容易ならしめるための作業ではない」⁽⁴⁾

と云う学者もある。また「次に、宗教を必要とし、宗教を求めようとする宗教的主体たる人間の宗教意識」⁽⁵⁾（点線筆者）を、上からではなく（仏やさとり）、下から人間の側から研究しなおすことも必要では

あるまいか。

岸本英夫博士は、「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である」と、一応定義づけている。このことも亦、宗教が人間生活を中心として、いとまざるべきものであることを明かにしたものであると云えよう。宗学（一切の真宗についての学問を含めて）は、余りにも哲学化され、観念化され、神秘化され、神話化されすぎてはいないであろうか。宗学は端的に云えば人間学でなければならぬ。一般の平凡人が理解しにくい論理や体系の整備をもって、真宗学であると考えることは、易行道である真宗にとって反省しなければならない。

浄土真宗を専門に研究する最高の学府を卒業した者でさえも、「分らぬ」と悲鳴をあげ、卒業後更に修士課程や博士課程を経てさえも、真宗の本義を正しく理解できないとさえ云はれている。わずかな宗学者の難解な専門的研究によらずしては、真宗の正しい理解は不可能であろうか。それをまた「煩惱具足の凡夫」や、「極重の悪人」の衆衆に教え、説いている真宗の学問は今一度再検討されなければならぬのではあるまいか。いかにすぐれた研究であっても、伝統的な特殊な用語法を使用し、難解な論理を展開しては、現代の大衆は真宗に近ならず、真宗に親しみを持ち得ないであろう。加藤玄智博士ものべたように、もともと宗教は学問、哲学、論理ではなくて、本質的には信仰であり、生活なのである。信仰と生活にプラスになるような宗学、教学こそ現代教養、現代宗学の目標ではあるまいか。島地大等先生も「真

宗を理解せんには、哲学的、理論的の疑問を放棄し、批判的の見地を捨つべきものなること、換言すれば、解信に非ずして仰信なることを知るべし。」と云はれている。(7) 姉崎正治博士も「宗教意識は人類の生存より生ずる自然の結果なり」と、人間の生存が先きにあつて、それから生ずる結果が宗教なのである。宗教は本来的に人間を主体として発生したものであり、神秘性や奇蹟等は宗教にとって重要な要素ではない。姉崎博士はまた「宗教意識の特徴を表明すれば、人心が其の有限なる生存以上に、一切の統轄をなせる偉大の勢力あるを設定意識して此の勢力と自己との間に窮親的人格の關係を得んとするに発する心現象」である。(8) ここにも宗教における人間の意識、人間の存在が優先するものであり、天啓、神秘、伝統、形而上学、宗学、教養の存在は、この意識作用の働きに順応して生ずる必要な産物であると云はねばならない。

かくて宗教の教義、教養は常に人間を主体として考察するべきものである。宗教は人間より初まるものであることを忘れてはならない。(9) 仏教の場合、真宗の場合においても事情は全く同様であると云はねばならない。仏教は歴史的人格としてのシヤカ族の一王子シツダールタ・ゴータマが、二十九才にして出家して求道者となり、六年のきびしい身心の工夫によって覚者としてのブツダとなり、人間シヤカが仏陀シヤカとなったと云う根本事実を原点をおき、そこに起源した宗教であった。この原点を抜きにして仏教はあり得ない。従つて、仏教にとって最も大切な問題は、キリスト教の如く神ではなく、人間たりしシヤカ族の一王子をして覚者たるブツダとならしめた処の「もの

「そのものが問題である。¹⁰⁾キリスト教にあっては、神の存在と神の創造、神の支配、神の意思、即ち、天啓、啓示を否定するならば、キリスト教は成立し得ないであろう。これに反して仏教は、その出発点としては、現実の人生に於ける実存的人間の苦惱、この苦惱からいかにして解放され、自由となるか、が問題の焦点なのである。現実の憂悲苦惱からの解放と自由こそ、仏教の最高理想であり、究極の道標なのである。仏陀ブツダとは、実にこの現実の憂悲と苦惱から完全に自由になり、解放される原理となる道と法とを自覚し体得した最高の人格に外ならない。この解放された自由と平安の境地を「解脱^{げだつ}」と名づけ、「涅槃^{ねはん}」と云い、「成仏」「正覚」とも呼ぶのである。解脱とは現実の苦惱からの解放であり、離脱である。ネハンとは原語ニルヴァーナの音訳であり、邪悪なる利己我欲と情念の「火の吹き消された」静かなる世界を意味し、最高の自由と同意である。覚者とは真理、法、ダルマを体得した人の意であり、原語のブツダ、仏陀である。何れにもせよ、仏教の出発点となり原点となるものは、人間の実存に根強くからみつく、この苦惱であり憂悲であり、矛盾であり、悲歎である。この苦惱と憂悲との根源をつきとめ、これを解決した釈尊、ブツダの自覚と体験そのものが仏教に外ならない。従って、仏教には既に幾度かのべたように、超越的、一神的、支配的な神の存在は必要ではなく、覚者、ブツダと同じ道を歩むならば、万人は等しく釈尊と同じブツダとなれりと主張するわけである。人格の完成者、ダルマの体験者としての覚者、ブツダをブツダたらしめた法^{ダツマ}こそ、仏教に

あつてはアルファでありオメガである。ワルポール・ラフラ師はブツダの畧伝を次の如く語っている。

「ブツダの名はシツダールタ、姓はゴータマで、西暦前六世紀頃北部インドに住んでいた。父はスードダナで、彼はシャカ族の王国の支配者であり、母はマヤーである。当時の習慣に従って、彼は十六才の若さで、美しい心、正しい心のヤソダラ姫と結婚した。若き王子は意のままに豪華な生活を王宮ですごした。併し彼は突如、人生の実相と人間の苦惱とに直面して、この普遍的苦惱からの解決の道を求めんとして、二十九才の時、一子ラフラの誕生後間もなく王国を去り、一人の苦行者となった。六年の間苦行者は、ガンジス河の流域をさまよいつき、有名な宗教的教師に会い、道を学び、師の示す体系や方法に従い、きびしい苦行に身をささげた。併し、それらは彼を満足させなかった。そこで彼は一切の伝統的宗教と、その方法とを捨て、彼自身の道歩んだ。かくてある夜ブダガヤの近く、ニレンジャ川のほとりにあるピッパラ樹の下に静座した。三十五才の時、ゴータマは悟^{サトリ}を開いた。さとの後、ゴータマ・ブツダは最初の説法を、バナレスの近くにあるサルナートに居た旧友である五人の仲間^{サト}に説いた。それ以来あらゆる階級の男女、国王、バラモン、農夫、浮浪者、銀行家、乞食、聖者、盗人―に対してもしささかの差別なく説法した。彼は階級制度なり社会的集団に何の差別を認めず、彼の説いた道は、あらゆる男女―道を理解し道に従はんとするすべての者に開放された。八十才にして、ブツダはクシナガラに於て入滅された。」¹⁰⁾(私訳)

極めて粗野な表現ではあるが、人間シヤカがブツダ・シヤカとなり、道と法とを体得し、伝道し、静かにこの世を去った姿が目に見えようである。ともあれ真宗を学ぶ前に、われわれは先ず仏教の原型を学ばねばならぬ。

二、仏教の神観と救済観についての問題

仏陀は、死後に於て弟子達の悲しみと、偉大なる師を思う心、その他色々の事情によって神格化されたが、本来の仏教では超越的の神の存在は全く否定されていた。この意味で仏教は無神論であった。無神論なるが故にまた無祈禱であった。無神、無祈禱を宗教の特性とする仏教は、宗教としては全く特異の存在であろう。そのために、神と祈禱とを中心とするキリスト教の世界に生れ育った、西欧の学者の中には仏教の宗教性を否定する学者もある。

「吾々は歴史的目的からは仏教を宗教として分類することは出来るが、仏教は実際には宗教的観念を欠除しており、宗教の名を受くるに値いしない。」⁽¹²⁾

「少くとも、最も初期に於ける、そして最も真正なる形での仏教は、全く宗教ではなくて、人生に対する厭世主義的理論の上に築きあげられた単なる道徳及び哲学の体系である。」⁽¹³⁾

フランスの印度学者ビュルヌフはその著「印度仏教史序説」に於て仏教を「神を持たぬ道徳的組織および自然なき無神論である」と述べ、

ドイツの仏教学者オルデンベルグも彼の著「仏陀、その生涯と教理教団」に於て、

「解脱を渴望する世界を支配するものとしては、一個の神もいず、因縁の連鎖という自然の法則がただ一つ残されておるのみである。これらの学者は仏教の非宗教性、乃至は無神論を強調し、仏教はむしろ道徳、哲学の体系であると主張している。」

今少し仏教の原型をさぐる資料について検討しておきたい。ブツダは、この世最後の弟子達への説法として次のように語っている。

「さればアーナンダよ、なんじらはただ自らを燈明とし、自らを帰依とし、他人を依処とせず、法を燈明とし、法を依処として、他を依処とすることなく住するがよい。」⁽¹⁴⁾

自燈明、法燈明、自歸依、法歸依こそ全仏教体系の基本的な柱であると云はねばならぬ。

仏教が本来主張したもの、仏教の底を流れているところのものをさぐってみたい。

「仏教徒は、単に仏陀に歸依し、仏陀を信ずることによって、白らの浄化をなし得るとは考えない。他人の不浄を洗い流すことは、仏陀の力の限界外のものである。厳密に云って、人は他人を浄化することも出来ないし、又他人を汚染することも出来ない。教師としての仏陀は補助役的なものであり、吾々自身の浄化は吾々自身に責任がある。」⁽¹⁵⁾

人間自身が常に自らの責任者であることをはっきりと、説かれてい

る点は注目すべきことである。

仏陀は、真理の探求者に対して、他人の權威にのみたよって何ごとも承諾してはならないと助言している。吾々自身の理性を働かせ、何が正しいか、何が不正であるかを自分の力で判断せよ。⁽¹⁷⁾

それが真理であるか、ないかを判断し決定する最終の基準は汝自身であつて、それは理性の働きであると仏陀は教えた。

「更に、仏教には祈りのないことをのべておかねばならない。いかに仏陀に対して祈ったところで、人は救はれることは出来ない。仏陀は世俗的な願ひについて祈ることをなしてはならない、又、祈ったところで救はれることは出来ない」と説いた。むしろ、自己自身に信賴すべきであり、自らの自由と浄化とをからとるためには、努力してはげむべきである。」⁽¹⁸⁾

祈りや願ひによつて人は救はれることはなく、自らの浄化や解放をからとることも出来ない。

「多くの宗教に於けるように、仏教徒は恐れたり、服従すべきような、全能の創造神を仏教は持たない。」⁽¹⁹⁾

全知全能の神の否定が説かれている。

ヒューム教授は、「仏陀は単に苦惱から離脱する道の教師にすぎない」とのべている。更に氏は、「東方聖書」第十一卷の一四頁と、ハーバード大学の「東方シリーズ」に記載された「翻譯仏教」を引用して次のようにのべている。

「ブツダの主要な教説であり、死の直前に於ける最後の主張にもあ
る如く、自己信賴、倫理的な生活、そして他のいかなる神的存在に対

しても帰依することに反対した彼自身が、後に到つて、世界史に存在した他のいかなる人々よりも、多数の人々によって崇拜されたことは、歴史の皮肉の一つである。」⁽²⁰⁾

ハストン・スミス氏は、仏教の項目についてのべるに当り、その第一頁に於て、「仏教は人間と共に初まる(Buddhism begins with a man.)と云い、さらに彼は仏教の顯著な特性として次の六項目をあげている。」(筆者要項訳)

1. ブツダは權威オーソリチを持たない。
 2. ブツダは儀式リチュアルを持たない。
 3. ブツダは思弁スペキュレーション的なものを持たない。
 4. ブツダは伝統トラディションを持たない。
 5. ブツダは強烈な自己精進セルフ・エホップを説いた。
 6. ブツダは超自然スーパ・ナチュラルなものを持たない。⁽²¹⁾
- 彼はまたブツダが宗教にアプローチする仕方について次のように要約している。

1. 經驗的 (empirical)
 2. 科学的 (scientific)
 3. 実用的 (pragmatic)
 4. 治療的 (therapeutic)
 5. 心理学的 (psychological)
 6. 民主的 (democratic)
 7. 個人的 (individual)⁽²⁴⁾
- エドワード・ジュリシ氏の編集した「近代世界の大宗教」の中で、仏

教の担当者であるライシャワー博士は、仏教の本質として次のようにのべている。まことに注目すべき主張である。

「ブツダは、強い有神論的な性格を持つもの、宗教一般における、神的なるものについての思想や、人間と神との関係と云ったものを彼の教説の最前線にはおかなかった。彼は上からの啓示を主張せず、ブツダを、神の意思を告げるような予言者としても語らず、又ブツダは、神の慈愛や神の贖罪の福音を人間にもたらすものとも云はなかった。(中略)彼は徹底的に自己への信頼と自己の努力とを説いた。彼はしばしば冥想したが、かつて彼が祈ったとか、弟子達に祈れと教えた、との記録はない。」⁽²⁴⁾

同氏は、自著「日本仏教の研究」の中でも次のように述べている。

「救済とは、現実の諸悪から解放されることであり、又、結局は人間は人間自身の手で救済せねばならぬ、(点線筆者)との当時の思想に共鳴した。併し、彼はこれらの二つの教義を厳格にまもったが、それを実行するものは少数であった。このために彼はその時代の思想とも著しく異り、又、あらゆる時代の多くの人々の思想とも異っていたので、神の観念や個人の実際の来世生活を考へる余地を全く残さなかった。」⁽²⁵⁾(点線筆者)

エディス・ホランド氏は、ブツダ・ゴータマは、弟子達に対して、来世のことについては殆んど語らず、寶石にちりばめられた世界で、正しき者があらゆる快樂をたのしむことについても多くを語らず、彼はただ涅槃ニルヴァーナの中では、あらゆる苦惱は消え失せ、人間の情欲の嵐は静められ、憎悪の火や邪悪の念はみな吹き消される、とのべている。ホー

ナ氏が「救済は本質的には自己自身からくるものである」と、のべたのも全く同様の趣旨であろう。

ホップキンス教授は次のようにのべている。

「ブツダは創造神の観念をあざ笑い、靈魂の観念を否定した。」⁽²⁶⁾「すべての人間は彼自身の運命を作るものである。」⁽²⁷⁾「靈魂と神とを否定する点に於て、彼ブツダは多くの現代無神論者の一人であった。」⁽²⁸⁾

西欧的資料の紹介はひとまず以上に止めておき、最後に仏教の根本的態度、そして仏教の原型を見極はめるために、仏教自体の中から若干の資料を取り出してみたい。

先ず最も古い經典の一つと云はれる法句經(Dhammapada)の中から、これらの問題に関する一連の章句を紹介してみたい。⁽²⁹⁾

「自己こそ自己の主なれ、ほかに主はよもあらず、自己をととのえ、おさめてぞ、ひとは得難き主を得」(法句經原典一六〇)

「汝よみずから燈をともし、とくはげめかし、賢者たれ、けがれを払い罪なくば、再び老死に近づかじ」(同二三八)

「われ悪なせばわれ濁り、われ善なせばわれは澄む、澄むも濁るもわが心ひとつにぞよる、われならぬよそびとのよく、わが心を浄めつくさんことあらず」(同一六五)

「空にとぶとも、はた海に入るとも、山の巖窟イワアナにかくるとも、罪業をまぬがれん方所サトよもあらず」(同一二七)

「道をゆかんにわれに増すよき友もなく、ふさわしき道伴ミチナヒなくばひ

とりゆけ、愚者に伴侶トキたることなかれ」(同六一)

「こころによりてものみなは、みちびかれてゆく、こころこそもの主なれ」(同二)

「なべての悪をつくらずで、なべての善にはげみつ、こころを淨めんことぞこれみ仏たちのおしえなれ」(同一八二)

「正覚ヤリのみちマドレにこそろして、むさぼり断つタをたのしみに、執トウわれレこころ煩悩マドレをつくしかがやくそのひとは、現世ながらはやすでに、涅槃サトリに入りしひとなれや」(同八九)

中村元博士の「ゴータマ・ブツダ」の中より、仏教の原型についての資料をいくつかあげて見たい。

「スパツダよ、わたくしは二十九才で善を求めて出家した。スパツダよ、私は出家してから五十年余となった。正理チと法ホウの領域リキョウのみを歩んで来た。これ以外には(みちの人)なるものも存在しない。」⁽⁸³⁾

「歴史的人物としてのゴータマはその臨終においてさえも、仏教ブツトウというものを説かなかつた。かれの説いたのは、いかなる思想家、宗教家でも歩むべき真実の道である。ところが後世の經典作者は右の詩に接続して、仏教という特殊な教えをつくってしまったのである。」⁽⁸⁴⁾

「次いで釈尊は深更に亡くなったのであるが、それについて古く詩によってその事件が詠ぜられた。

世間における一切の生有るものどもは、ついには身体を捨てるであらう。あたかも世間において比すべき人なき、かくのごとき師、力を具えた修行実践者、正覚者がなくなったように。

つくられたるものは実に無常であり、生滅の性あるものである。生じては滅びる。これら(つくられたるもの)のやすらいが安樂である。」⁽⁸⁵⁾

「心の安住せるかくのごとき人にはすでに呼吸がなかった。欲を離れた聖者はやすらいに達してなくなられたのである。

ひるまぬ心を以て苦しみを耐へ忍ばれた。あたかも灯火の消え失せるように、心が解脱したのである。」⁽⁸⁶⁾

「その時この怖ろしいことがあった。そのとき髪の毛のよだつことがあった。あらゆる美德を具えた正覚者がおなくなりになった。」⁽⁸⁷⁾

また最も古き經典の一つである「スッタニパータ」にアシタ仙人の釋尊への予言の記事がのっているが、その中に次のようなことが云はれている。

「無比の妙宝であるかのボーディサッタ(未來の仏)は、もろびとの利益安樂のために人間世界に生れたまうたのです。シャカ族の村に、ルンビニーの聚落に。だがわれわれは満足し、非常に満悦しているのです。一切衆生の最上者、最高の人、牡牛のような人、生きとし生けるものうち最上者は、やがて仙人(のあつまる処)という名の林で(法)輪を転ずるであらう。―猛き獅子が百獸にうち勝つて吼えるように。」⁽⁸⁸⁾

「これは無上の人です。人間の最上者です。」⁽⁸⁹⁾

更に、中村博士は「人間として尊敬されたゴータマ」との見出しで次のようにのべている。

「教団が発展して変容すると、仰がれる開祖のすがたも発展し変容

する。釈尊ゴータマは、永遠の真理 (dharma) と呼ばれる。しかしらば、真理をさとした人はみな覚者であるといわなければならぬ。その人は何ら超自然的な存在でもなれば、神秘的な人物でもない。いわんや超越神のごとき存在でもないはずである。

原始仏教聖典をみると、古い層と新しい層とは、非常に思想の相異があるが、その古い層についてみると、仏教の開創者ゴータマはどこまでも単にすぐれた人間として考えられていた。

普通後代の仏教徒はゴータマのことを釈尊 (釈迦牟尼 Sakyamuni) と呼ぶが、初期の仏教においては仏弟子がゴータマに向かって「シヤカよ」 (Sakka) とよびかけている。釈尊のことを尊称をつけないで「シヤカよ」と呼びかけることは、詩のうちにのみ見られ、散文のうちには存しないようである。故に初期の仏教徒はゴータマをシヤカ族の一人の人間とのみ見なしていたのであった。⁽⁴⁰⁾

その他の呼び名として「きみゴータマよ」 (bho Gotama)、「大仙人」、「世尊」、また「ヴェーダを知れる人」、「ヤツカニ夜叉」、更には、ジャイナ教の用語例に従って、「真理を語る人」「勝者」「偉大なる英雄」等とも呼ばれていた。⁽⁴¹⁾

「ともかくブツダはどこまでも人間であったから、かれは「人間のうちで最上の人」或いは「一切の生きものの中で最上の者」と呼ばれる。」⁽⁴²⁾

舟橋一哉教授は仏教の原型を示唆する資料として次のようにのべている。

「一仏教の教える所はいつでも自己が焦点である。いかに高尚幽

玄な哲理でも、自己と何等の関係もないものならば私にとつては弊履にも等しい。仏教の目的は転迷開悟である。」⁽⁴³⁾

又古くから仏の十号としてブツダを呼ぶ称号として、「如来、応供等正覚、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊」が使用されたことも、仏教の原型を知る上に貴重な手がかりであろう。何れにもせよ、釈尊、ブツダ、ゴータマを語る言葉、文章の中には、どこにも超自然的、超人間的な意味を持つものはなかったようである。このようなブツダが色々な事情や経過を経て、全く人間を超えた、人間とは本質を全く異にする神秘的、不可思議のブツダとなり、やがてそのような思想の中から、同じ性格を持つ不可思議、超人間的、超自然的アミダ仏が説かれるようになった、歴史的発展の経過なり事情は、宗学的研究では余り深く論究されておらないのではあるまいか。殊に、観念論的、形而上学的であるか、さなくば神話的、伝説的な物語りの表現を宗学や教学は採用しているのである。難解な用語や体系を近代化することは容易ではあるまいが、努力せねばならない。

三、仏教の原型と真宗の問題

仏教の原型はすでにのべたように、ブツダが解脱、涅槃を体験した事実に出発している。

五戒、六婆羅密、戒定慧の三学、無常、無我、縁起法を教えの基底とし、正覚、さとりで精進せよとブツダは四十五年間も説きつづけた

のであった。このような教説の中からどうして浄土教的、特に浄土真宗のような教えが発生したのであろう。「別途不共」などと云って、大乘仏教の中でも特別の途、道であり、他の仏教と何らの共通点を持たぬ真宗、と云うような教えがどうして主張されるのであろう。キリスト教の一神教にも似たアミダ仏が、どうして説かれるようになったのか。自業自得、自因自果、因果応報は仏教の鉄則なのであるが、法蔵菩薩の代受苦による、アミダ仏の他力の本願が万人に廻向される、と云うような他力の教義がどうして物語られているか。現世の中でさとりを開くことを原則とする仏教の中に、そして死後の世界について何ら説かなかつた仏教の中に、死後の浄土に往生して仏性を開發すると云うようなドグマがどうして語られているか。ナムアミダ仏と云う仏の名を称えることによって、また万人救済の意思としての他力の本願を信ずることによって、極楽に再生して仏のさとりを体験することができると云うような教義が出てきたのか。こう考えると、「どうして」と一応どうしても問はざるを得ない数多くの問題が、真宗には伏在している。色々な説明や論理が宗学なり教学には説かれているが、みな仏教の原型からは遠くはなれた、思弁的、独善的、形而上学的、弁護的、是認的なものが多いようである。特に仏性論について問題が多い。

「大乘仏教が如何にして斯かる純粹信の教義に発展したものと怪しむ者もあろう。この信心の教義は、普通原始仏教と考えられて居るもの、即ち般若の智慧に依る自己信頼と正覚の教義とは、一見甚しい相違を示している。従って又往往真宗は全く非仏教的なもので

あると考えられる事すらある。」⁽⁴⁴⁾
 「大乘仏教は積尊金口の説に基く宗教ではなくて、むしろ積尊の生涯と人格とをめぐって発展した宗教である。」⁽⁴⁵⁾ (点線筆者)
 英国の仏教研究者、クリスマス・ハンフリーズ氏は、この点を次のようにのべている。

「實際彼等のなすところは、夜、屋念仏を唱えることであり、神秘的感覚の知識とは異なるものであり、何んとかして、どこかで、誰れかが彼等の罪の結果から助けられることを希望することである。これは容易であり、単純な宗教である。なぜなら凡ての行が一人のためになされておる。それ故に、この道はたちまち普及した。そしてそれは全然宗教ではないと云った方がいいのではなからうか。はたして真宗は仏教であろうか。」⁽⁴⁶⁾

かくて真宗の宗教性、仏教性には少くとも問題がひそんでいる。

「如来の作願をただずぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたひて、大悲心をば成就せり」⁽⁴⁷⁾ (点線筆者)

「願作仏心は度衆生心なり」⁽⁴⁸⁾ (点線筆者)

そもそも本願は誰れのものか、と質ねてみると「苦惱の有情」のためのものであり、「衆生済度」のためのものである。苦惱の人間、衆生をはなれて仏もなく、本願もなく、浄土もなく、救済も成りたち得ない。「他力の悲願はかくのごときわれらがためなり」⁽⁴⁹⁾ (点線筆者)とさえ示されてある。「極重の悪人」⁽⁵⁰⁾ あつての、「煩惱具足の凡夫」⁽⁵¹⁾ あつてのアミダ仏であり、本願であり、救いであり、往生である。現実の私をぬきにしてはすべては無意味である。主体性はあくまでも人間

でなければならぬ。だのに真宗はアミダ仏に出発し、本願を前提と
しているようである。これでは「初めに神あり」のキリスト教と何ら
変りがない。初めにアミダ仏ありである。真宗は、否、仏教は人間
から出発した宗教である。人間学的、人間中心の宗教ではあるまい
か。

仏教の原型の中には見られなかった、アミダ仏、本願他力、往生浄
土、唯信独達の救済的宗教、仏教としての真宗思想の特色を明確にす
るにはさらに一段の研究が必要ではなからうか。水野弘元氏は原始仏
教の特質の章で、

「仏教の特徴として、第一に知的には合理性、客観性、第二に情意
的には倫理性、人間性、第三には世界性、普遍性、解放性等の三点
を挙げることが出来る。」⁶²⁾

とのべている。真宗を研究するためにも、仏教の原型を理解するた
めにも必要な手がかりとならう。

(昭和四十七年九月二十日受理)

〔註〕

- ① 金子大栄・親鸞著作全集・八六頁
- ② 星野元豊・真宗の哲学的研究・四一―六二頁
- ③ H. J. Blackham, *Six Existential Thinkers*.
- ④ 加藤玄智・宗教学・八二三頁
- ⑤ 同右
- ⑥ 岸本英夫・宗教学・十七頁
- ⑦ 島地大等・真宗大綱・十二頁

- ⑧ 姉崎正治・宗教学・十二頁
- ⑨ Huston Smith, *The Religion of man*. p. 90.
- ⑩ 岡邦俊・宗教の根本問題・七三―四頁
- ⑪ *The Story of the Buddha*: E. Holand. p. 38
- ⑫ Menzies: *History of Religion*: p.353; 380; 424.
- ⑬ Monier-Williams: *Buddhism*. p.537; 539.
- ⑭ 岸本英夫編・神の問題・一二二頁
- ⑮ 中阿含・二―四頁
- ⑯ *Narada Maha Thera*. p. 8
- ⑰ *ibid.* p. 11
- ⑱ *ibid.* p. 12
- ⑲ *ibid.* p. 13
- ⑳ E. Hume, *The World's Living Religion*. p. 66
- ㉑ *ibid.* p. 67.
- ㉒ Huston Smith, *The Religion of Man*. p. 90.
- ㉓ *ibid.* p. 102-105.
- ㉔ *ibid.* p. 106.
- ㉕ *The Great Religion of the Modern World*.
Ed., J. Jurji. p. 96-7. A. K. Reischauer.
- ㉖ A. K. Reischauer, *Studies in Japanese Buddhism*. p. 38.
- ㉗ E. Holland. p. 69
- ㉘ Ananda K. Coomaraswamy. p. 19
- ㉙ W. Hopkins, *History of Religions*. p. 184.
- ㉚ *ibid.* p. 185.
- ㉛ *ibid.* p. 186.
- ㉜ 浄土真宗学校連合会編・聖典・聖歌「法句経」
- ㉝ 中村元・ブータマ・フツダ・二〇九頁
- ㉞ 同右・二一〇頁
- ㉟ 同右・二一〇―二二二頁

- ③6 同右
- ③7 同右
- ③8 同右・三五頁
- ③9 同右・三六頁
- ④0 同右・三〇六頁
- ④1 同右・三〇六―三〇九頁
- ④2 同右・
- ④3 舟橋一哉・原始仏教思想の研究・十六―十七頁
- ④4 鈴木大拙・浄土系思想論・二頁
- ④5 同右・五頁
- ④6 C. Humphreys, *Buddhism*, p. 165.
- ④7 親鸞・正像末和讃
- ④8 曇鸞・論註
- ④9 歎異抄・九節
- ⑤0 親鸞・正信偈
- ⑤1 歎異抄・後序
- ⑤2 水野弘元・原始仏教・一〇三頁

(大学・短大教授)